NPOコミュニティシンクタンクあうるず東北支援活動

「がんばれ東北! From十勝」

2011年3月

NPOあうるずでは、東日本大震災発生後の3月17日から「がんばれ東北! From十勝」トラック計3便を、宮城県登米市宮城県災害対策本部、岩手県岩泉町役場災害対策本部に向けて走らせ、皆様からお預かりいたしました救援物資を無事届けてまいりました。また、帯広建設業協会様、帯広畜産大学の皆様をはじめ多くの方から救援物資及び輸送費用をお預け頂き、梱包・積込み作業をお手伝いいただきました。本法人スタッフも現地を訪れ、被災地の皆様に喜んでいただきました。本紙面をお借りしまして、ご協力いただきました皆様へのお礼と、本活動のご報告をさせていただきます。「がんばれ東北! From十勝」の詳細につきましてはHPをご覧下さい。
http://www.netbeet.ne.jp/~owls/

物資をお届けした日程

3月17日（木）／宮城県登米市宮城県合同庁舎災害対策本部／４ｔトラック
3月18日（金）／岩手県岩泉町役場／２ｔトラック
3月23日（水）／岩手県岩泉町役場／２ｔトラック（帯広畜産大学と共同実施）
3月26日（土）／岩手県岩泉町役場／２ｔトラック（帯広建設業協会と共同実施）
3月26日（土）／岩手県岩泉町役場／大型バス（帯広建設業協会と共同実施）
3月29日（火）／岩手県岩泉町役場／燃料輸送車（河井ローダ建設工業の支援）

救援物資をお預け頂いた会社

・株式会社満寿屋商店・農事組合法人共働学舎新得農場・有限会社屈足肉牛牧場・十勝おやじの背中を越える会・株式会社K`s FARM（ケーズファーム）・夢想農園CROPS（クラップス）・株式会社オカモト・帯広市川西農業協同組合・帯広商工会議所青年部・渋谷醸造株式会社・本別発豆ではりきるお母さんの会・本別町まめっこ倶楽部・株式会社山本忠信商店・足寄町農業協同組合・髙橋まんじゅう屋・十勝キャリアデザインネットワーク・北のフードソムリエ・株式会社北村商店・有限会社尾藤農産・小島農産　美藤農場・大丸藤井株式会社道東支店・六花亭製菓株式会社・株式会社豊似建設工業・有限会社ケイセイ印刷・株式会社ウィネット・Ｗａｔｔ（ワット）・有限会社くさなぎ農園・鎌田輪業有限会社・有限会社ユニオン北海道・税理士法人井上会計事務所・有限会社ユニハート・とかち ディサービスこころホームメイドケーキサロン・NPO法人オーディナリーサーヴァンツ・シアンルルめぐみ　（順不同）

救援物資をお預け頂いた方々

・佐藤好美様・高山和子様・堀川涼子様・佐藤芳弘様・山田翁湖様・渡辺栞菜様・松野春江様・矢戸一男様・後藤栄城様・清原三枝子様・斉木良博様・村上知亜砂様・加藤博様・中村京子様・寺島琴美様・三島礼菜様・工藤亜由美様・三原舞様・桝屋ちか様・小笠原美幸様・川岸幸奈様・佐々木麻美様・葛西せいら様・渡邊和香子様・長江ももえ様・笠谷かおり様・三浦かなみ様・中野まき様・西川育未様・久野百恵様・種村まどか様・清水舞依様・米澤綾子様・平尾まゆみ様・高砂真弓様・難波俊彦様・林隆司様・松田恭子様　（順不同）

共同で実施した団体

・国立大学法人帯広畜産大学　・帯広建設業協会　・河井ローダ建設工業株式会社

NPOあうるず　菊池のブログ

東北地方太平洋沖地震の日から6日後、支援活動として始まった「がんばれ東北！fromとかち」プロジェクトはNHK、北海道新聞、十勝毎日新聞の協力をえて、一日ですごい量の支援があつまりました。

企業，個人を問わずに呼びかけると若いお母さんたちが紙おむつ、毛布、農業者はジャガイモ3t、豆など十勝の農産物で日持ちのするものを持ってきてくれました。

地場産小麦利用で絶大な人気のマスヤパンからは日持ちのするラスクを14箱、豆おろしのの山本忠信商店からは豆120kg、小森社長のエコマックスジャパンからはソーラー懐中電灯を40本いただきました。

17日、宮城県登米の災害復旧本部にむけて第一陣が出発しました。宮城県の地域振興課の方が待ち受けてくださり渡してきます。今回のドライバーはNPOあうるずの土屋さんです。

18日11時にフェリーで大間に着いている頃です。これ以降は救済物資支援の指定を警察署からうけているため高速道路などを使用でき、夕方には着く予定です。
また、第二弾は18日12：00頃、岩手県岩泉町に出発します。いまでも電話やメールがつながりにくい状況ではありますが、メールと電話で最終打ち合わせをしました。

この頃峠はマイナス13度に下がったそうで、恐らく路面凍結など困難があるでしょうが「こちとら十勝だ！凍結路面はまかしとけ！」という意気込みで出発しました。
考えてみると、スタッドレスタイヤの用意や凍結への対応などになれてない地域では支援に手間取りそうですね。
さらに、NPOあうるずの代表理事の帯広畜産大学では学長から教授へ、教授から学生へ、学生から市民へということで多くの支援があつまりました。
その多くは購入してきた新品かほとんど新品の品物です。
今回はマイナス気温という情報もあったので、防寒着もあつまりました。

菊池貞雄ブログ→http://kikusada.blogspot.com/

おむつを持って来てくれた若いお母さんたち

2011年3月17日～20日第一号車土屋さんのレポート

18日、朝、燃料を満タンにしフェリー乗り場へ。フェリーは大型トラックで満載、予約をしていたが最後にやっと乗れた。港にはたくさんのトラックがキャンセル待ちで並んでいた。長距離トラックの運転手さんに本州の道路の状況を確認。太平洋側は時間がかかるので、日本海側をとおり新潟から高速で東京に戻るルート。太平洋側は通れないという情報だった。

11時に大間に到着。フェリーターミナルで情報収集。地元警察にいきルート確認。緊急車両の登録をしていたため、高速道路での移動ができるのを確認。大間～むつ～六ヶ所村～八戸ここまで一般道、道が狭いため４０Ｋから５０Ｋでの移動となる。途中のガソリンスタンドはすべて休業状態。仙台までたどり着くか不安になる。

帯広で用意してもらったパンやお菓子をたべながら南下を続ける。フリスク、栄養ドリンク、ブラックコーヒーどうもありがとうございました。これがなかったら、持ちませんでした。三沢の近くで道路に漁船が打ち上げられているのを見た以外は国道は普通に走れた。八戸から高速道路にのる。緊急車両以外は通行できないため南下する車両はほとんど見られなかった。坂になると５０Ｋまでスピードが落ちるため、電気工事の車両が抜いていく。対向車線はアメリカ軍のトラックや自衛隊、救急車、タンクローリーだけが走っている。

１６時岩手山パーキングエリア着。自衛隊や救急車、電気工事車両が数多く駐車している。サービスエリアの食堂が開いており通常の営業を行っていた。スタンドも開

いておりみな給油をしていた。1台３０Ｌまで、10分ほど並び給油した。途中前沢サービスエリアで２０Ｌの給油。高速道路の破損は見られず、渋滞もなく移動できた。

18時30分若柳金成インターチェンジをおり一般道へ。町は電気はついているが全体的なくらい。お店は全部閉まっていて、住宅も半分ぐらいは電気がついていなかった。道路は多少の陥没は見られたが、補修が終わり通行に支障はなかった。ガソリンスタンドはしまっていたが、ポリタンクを持った住民が目についた。途中警察所により道路状況を確認。登米合同庁舎に向かうが道路の陥没、住宅の崩壊が目に付く。

19時４０分対策本部に到着。電気はついているが回りは薄暗い。２階にある対策本部に駆け込む。会議中だったがあうるずと名乗ると、会議を中断、全職員で荷物の整理をするという。職員からはねぎらいの言葉をかけてもらう。庁舎1回の倉庫にトラックを横づけ、車を50名近い職員が取り囲みみんなで手渡しで倉庫に搬入。荷造りに使用したシートを敷き、分類しながらつんでいった。量の多さに驚いたようだ。ここを基点に被災地に物資を運ぶという。

菓子パンなどが目につくが、保存の利くものは別の倉庫に入れているといっていた。自衛隊の車両も駐車場にとまっており、被災地への運搬も今は問題なく行われているといっていた。作業は30分ほどで終了し、事務所2階の対策本部で佐々木和好所長、加藤喜彦副所長と面談。ねぎらいの言葉をかけていただく。職員の多くは事務所に泊りこんでいる、電気は通ったが、水道はまだ飲める水ではない。灯油がないため暖房は切れたままの状態だ。事務所の中でも防寒着は手放せない。今回の救援物資の趣旨を所長に説明し、周りの状況をお聞きする。遠いところから大変でしたでしょうと職員の方々から声をかけていただいた。先ほど中断した会議も再開されたため、車に戻り夜明けを待ち仙台に移動することを伝えると、ここを離れた方がいいといわれ、古川のホテルに泊まることを進められた。被災地に直接行って手渡したいと思ったが、そういう現状ではないことを確認し所長に戻ることを伝えた。加藤副長に先導され、古川市へ向かう。街灯がところどころついているが、道路の陥没が目に付く。迂回路を通って古川市へ。新幹線古川駅前のホテルへ。周りは陥没し車の駐車でできないため支庁舎の駐車場に置かせてもらう。ホテルはお湯はでないが寝れるだけでもありがたい。部屋の壁にひび割れが目立つ。

今朝、ホテルを出発、高速道路に着くまでの間、ガソリンスタンドを取り囲む人を数多く見た。スーパーにも開店前から人だかり10年で復旧できるだろうか、そのとき私たちは何ができるだろうか。これからが本当の支援活動だと思う。

2011年3月18日～21日第二号車川村さんのレポート

17日物資とトラックの予備燃料を積み込み、18日12時皆さんに見送られ函館に向けて出発、R38号線から日勝→日高→富川から高速に乗り落部で降りた。
函館には19時半に到着燃料を給油してフェリーターミナルに。やはりキャンセル待ちの大型車が何台も止まっていた。フェリーターミナルで乗船の確認をしたあとホテルでチェックインをして明日に備える。

朝7時半にホテルを出発し、乗船手続きを済ませたあと乗船待ちをしていると目の前の高速船に自衛隊車両を乗せていた。
8時50分乗船開始して9時30分に予定通り出航するも海は時化ていた。

11時に到着11時30分に大間港を出発一路岩泉町へ途中第1便の土屋さんからの情報を元に走り、大間から海岸線を通りむつ市でコンビニに寄った。コンビニではお弁当もおにぎりも何も無い状態だ。

むつ市から大間の方は比較的被害が少なかったと聞いた。海岸線を走っても家の倒壊等はなかった。

八戸北ICから高速に乗り東北自動車道へ…
本線に乗ってすぐ南郷で降ろされた。地震のため高速道路が通行止めになっていたが、緊急自動車の通行証を持っていたためまた本線に乗せてくれた。

九戸ICで降りてからはほとんどが山間の道路だ。トラックも満載積んでいたので坂道を上っていかない。

16時に担当の塚原さんに到着時刻を電話するが、山間なので携帯の電波もつながったり切れたりした。
17時岩泉町に到着。役場の職員が20名程待っていてくれた。運んだ物資を降ろしている時「わぁ～芋だぁ～」「六花亭のお菓子だぁ～」と皆さん喜んでくれた。荷降ろしをしたあとお茶でも飲んでいって下さいと云われ中に入った。建物の中には物資の山積み。そこで話を聞くと岩泉町も隣町の宮古市もかなりの被害だった様。職員用の写真データを見せてもらった。今も行方不明者の捜索は続けており瓦礫の下にはまだたくさんの遺体があるとの事。すぐに収容できない遺体の横に旗をたてているそうだ収容した遺体は棺も足りなく毛布に包んで火葬したり土葬したりしていると聞いた。何も無くなった町は前にここには何があったかも思い出せないと職員は口々に言っていた。

岩泉町の物資を取りまとめている建物の5キロ圏内に避難所が4～5箇所あるという。
最近になって避難者用の洗濯所が設けられた様だ。そこでは洗濯をしている避難者がいた。

いまだ電話回線は復旧していないため、連絡は携帯電話だけ。停電になると携帯電話も使えないガソリンも無いから遠くへも逃げれない、まわりは山と海しかなく陸の孤島に思えた。帰り際担当の塚原さんから二つのダンボールを手渡された。何かと思い覗いて見るとペットボトルに入った龍泉洞の水とリンゴジュース、パン、リンゴが入っていた。お土産にくれたのだ。これは全部岩泉のものだからと…物資の少ない今なのにそこまで律儀に考えていた。正直、涙が出そうになった。

被災者も役場の人達も一生懸命頑張っていた。北海道からわざわざ来てくれたのかと感謝もされた。大間に戻る時間もあったのでまた来ますからと約束をして岩泉を後にした。大間には23時30分ホテルに到着、翌日14時20分のフェリーで函館へ、16時函館に到着。帰りはうそのように穏やかな波だった。給油をして函館を後にして23時帯広に到着。

今回実際に被災地に行って話を聞いて来たがテレビで見るのとはまた違う気持ちになった。被災地ではまだ不自由な生活をしている。自分が思っていた以上だった。

新聞記事

2011年5月10日十勝毎日新聞

がんばれ東北！ From 十勝

特定非営利活動（NPO）法人
コミュニティシンクタンクあうるず

NPOあうるずでは、東日本大震災発生後の3月17日から「がんばれ東北！From十勝」トラック計3便を、宮城県登米市宮城県災害対策本部、岩手県岩泉町役場災害対策本部に向けて走らせ、皆様からお預かりいたしました救援物資を無事届けてまいりました。また、帯広建設業協会様、帯広畜産大学の皆様をはじめ多くの方から救援物資及び輸送費用をお預け頂き、梱包・積込み作業をお手伝いいただきました。本法人スタッフも現地を訪れ、被災地の皆様に喜んでいただきました。本紙面をお借りしまして、ご協力いただきました皆様へのお礼と、本活動のご報告をさせていただきます。「がんばれ東北！From十勝」の詳細につきましてはHPをご覧下さい。http://www.netbeet.ne.jp/~owls/

3月17日（木）／宮城県登米市宮城県合同庁舎災害対策本部／4tトラック
3月18日（金）／岩手県岩泉町役場／2tトラック
3月23日（水）／岩手県岩泉町役場／2tトラック（帯広畜産大学と共同実施）
3月26日（土）／岩手県岩泉町役場／2tトラック（帯広建設業協会と共同実施）
3月26日（土）／岩手県岩泉町役場／大型バス（帯広建設業協会と共同実施）
3月29日（火）／岩手県岩泉町役場／燃料輸送車（河井ローダ建設工業の支援）

【共同で実施した団体】・国立大学法人帯広畜産大学　・帯広建設業協会　・河井ローダ建設工業株式会社

救援物資をお預け頂いた会社

株式会社満寿屋商店　農事組合法人共働学舎新得農場　有限会社屈足肉牛牧場　十勝おやじの背中を越える会　株式会社K's FARM（ケーズファーム）　夢想農園CROPS（クラップス）　株式会社オカモト　帯広市川西農業協同組合　帯広商工会議所青年部　渋谷醸造株式会社　本別発豆ではりきるお母さんの会　本別町まめっこ倶楽部　株式会社山本忠信商店　足寄町農業協同組合　高橋まんじゅう屋　十勝キャリアデザインネットワーク　北のフードソムリエ　株式会社北村商店　有限会社尾藤農産　小島農産　美藤農場　大丸藤井株式会社道東支店　六花亭製菓株式会社　株式会社豊似建設工業　有限会社ケイセイ印刷　株式会社ウィネット・Wattt（ワット）　有限会社くさなぎ農園　鎌田輪業有限会社　有限会社ユニオン北海道　税理士法人井上会計事務所　有限会社ユニハート・とかち ディサービスこころ　ホームメイドケーキサロン　NPO法人オーディナリーサーヴァンツ　シアンルルめぐみ　（順不同）

救援物資をお預け頂いた方々

佐藤好美様　高山和子様　堀川涼子様　佐藤芳弘様　山田翁湖様　渡辺栞菜様　松野春江様　矢戸一男様　後藤栄城様　清原三枝子様　斉木良博様　村上知亜砂様　加藤博様　中村京子様　寺島琴美様　三島礼菜様　工藤亜由美様　三原舞様　桝屋ちか様　小笠原美幸様　川岸幸奈様　佐々木麻美様　葛西せいら様　渡邊和香子様　長江ももえ様　笠谷かおり様　三浦かなみ様　中野まき様　西川育未様　久野百恵様　種村まどか様　清水舞依様　米澤綾子様　平尾まゆみ様　高砂真弓様　難波俊彦様　林隆司様　松田恭子様　（順不同）

救援物資をお預け頂きありがとうございました。その他協力してくれた方々、本当にありがとうございます。

有限会社ケイセイ印刷、北海道バイオマスリサーチ株式会社、奥山様のご厚意により掲載させて頂きました。

特定非営利活動（NPO）法人
コミュニティシンクタンクあうるず
北海道帯広市東2条南4丁目10番地
TEL：0155-67-6305　FAX：0155-67-6307
E-mail／npo_ctt_owls@netbeet.ne.jp
HP／http://www.netbeet.ne.jp/~owls/

新聞記事

2011年3月18日（金）【第2社会】（第3種郵便物認可） 十勝毎日新聞 2

支援物資「必ず届

物資積み被災地へ

あうるず第1便出発

NPO法人コミュニティシンクタンクあうるず（代表理事＝梅津一孝帯広畜産大教授）がとりまとめ役となっている被災者支援活動「がんばれ！東北！from十勝」の第1便が17日午後0時半、同法人事務所前を出発した。食料、衛生用品などの救援物資を載せた4トントラック1台が宮城県登米市に向かった。

被災地に向けて出発した支援物資を載せたトラック（17日午後0時半すぎ、塩原真撮影）

満寿屋商店、共働学舎新得農場、十勝おやじの背中を超える会など管内約20企業・団体が連携。トラック（共成レンテム提供）は、函館でオカモトグループからの給油支援を受け、フェリーで青森県大間町にわたり、被災地に入る。あうるずは、緊急物資輸送用として警察から現地通行の許可を得ている。

第1便の救援物資は同法人が購入したジャガイモ3トンの他、レトルト食品、マスク、毛布、カイロなど。知人を通じて現地の市役所、役場と連絡を取り、要請のあった物資を用意した。同法人による と、乳児を連れた母親3人がおむつを持参するなど個人で活動に参加する人も多かったという。

現地には仙台市在住の姉夫婦が被災している北海道バイオマスリサーチの土屋博調査員（49）が1人で向かう。「皆さんから集まった善意を一刻も早く届けたい」と車に乗り込んだ。同法人の菊池貞雄専務理事は「支援物資は『被災地を助けたい』という気持ちが一つになったもの。被災した方々のお役に立てれば」と送り出していた。

18、22日にも岩手県岩泉町に向けて出発する。一般からの物資受け付けは終了している。（関根弘貴）

帯畜大挙げて食料や生活品

2便と3便で

帯畜大倉庫に集められた支援物資（17日午後、塩原真撮影）

帯広畜産大（長澤秀行学長）は、教職員と学生200人以上が独自に支援物資を集めた。18日出発の第2便、22日出発の第3便に分けて積み込み、岩手県岩泉町へ届ける。

あうるずの梅津一孝代表理事と菊池貞雄専務理事が16日、長澤学長と会談。「地域でできることがやりたい」と、学長の指示で全学的に物資の提供を呼び掛けた。同日だけで食品（米、カップ麺、飲料など）68箱、生活用品（タオル、カイロ、軍手、日用品など）50箱、防寒着8箱、毛布100枚が集まった。は同大職員らが仕分けして使いやすくした。

17日午後には、あうる

2011年（平成23年）3月15日（火曜日）（第3種郵便物認可）

トラックで物資持参へ

NPOあうるず 提供呼び掛け

被災者支援のため、NPO法人コミュニティシンクタンクあうるずが取りまとめ役となり、十勝から東北へ「民民支援」を実施する。現在まで管内14企業・団体が協力を受諾。4トントラックに食料を中心に支援物資を積み、17日に帯広を出発する。

あうるずでジャガイモ1トンを購入。満寿屋商店や共働学舎新得農場、親父の背中を超える会など協力者から農産物やラスクといった食料のほか、ソーラー懐中電灯なども届ける。地元企業からトラックの提供、オカモトグループから途中の給油支援を受ける。すでにフェリーも押さえ、仙台商工会議所など現地と常に連絡を取りあっており「迷惑を掛けない場所まで物資を運ぶ」としている。

事務局では、出発まで地元企業や地域農業者に、自社取扱商品や日持ちする食料品、衛生商品などの提供を呼び掛けるとともに、未使用毛布も募っている。菊池貞雄専務理事は「今必要なのは少しの助けだと思う。フットワーク良く、できることをしたい」としている。問い合わせは事務局（0155・67・6305）へ。

北海道新聞（夕刊）2011年4月12日（火）

帯広のNPO法人「あうるず」は3月17日から支援物資を積んだトラックを計5回、宮城や岩手県の被災地に送った。竹内良曜さん（左）は「日がたつにつれ支援すべき内容が変化している」と語る。今大事なのは「心の二次災害」を防ぐ手だてを講ずること、そして考えたくもないが「次の大震災」を防ぐ準備をすることと言う（浜本道夫撮影）

雑記帳

◇東日本大震災の被災地に向け、北海道帯広市のNPO「コミュニティ・シンクタンク・あうるず」が民間主体で救援物資を送る「支援トラック」を走らせている。

◇トラックにはスタッフが乗り込み、地元の企業や個人から提供された物資＝写真＝を直接、被災地に届ける。既に地元農家から譲り受けたジャガイモ約5トンなどが宮城県登米市などに届けられている。

◇26日出発の第4便では帯広建設業協会が、被災地から要望の多かった医療品などの提供を加盟148社に呼び掛けた。「直接行き来するから、現地のニーズに素早く応えられる。民間らしいフットワークの良さを見せたい」と意気込む。【三沢邦彦】

2011年3月24日　毎日新聞掲載

新聞記事

2011年3月16日十勝毎日新聞

トラックで物資供給

管内の企業など あす宮城へ出発

十勝管内の16の企業や団体が、東日本大震災の被災者支援のため、「民・民支援」トラックを現地に出す。NPO法人コミュニティシンクタンクあうるずが呼びかけ、食料などの生活支援物資を積み17日に帯広を出発、18日に宮城県登米市に到着する計画だ。

支援に参加するのは満寿屋商店、共働学舎新得農場、若手農業者の「おやじの背中を超える会」など。

あうるずは地元の建設関連業者から4トントラックを借り、ジャガイモ1トンを購入して届ける。各企業や団体はラスクや農産物、ソーラー懐中電灯、寝具などを提供。オカモトグループは、各地のスタンドで燃料を提供する。

車両には、あうるずスタッフの土屋博さん(49)ら2人が乗る。函館からフェリーで青森県へ渡り、陸路、登米市へ。同市には県の対策本部があり、物資搬入の連絡もついたことから、あうるず事務局は「本当に困っている地域に物資が届けられそうだ」としている。

「民・民支援」トラックを呼びかけた、あうるずの菊池専務理事(左から2人目)、土屋さん(同3人目)ら

あうるずは、十勝の企業や農業者から支援物資を募っており、菊池貞雄専務理事は「民間団体として、フットワーク良く物資を届けたい」。問い合わせはあうるず事務所☎0155・67・6305へ。(川原田浩康)

2011年3月30日(水)十勝毎日新聞掲載

【第2社会】 (第3種郵便物認可) 十勝毎日新

チャリティーで復興支援

多くの協力呼び掛け

東日本大震災からの復興を支援しようと、十勝管内で多くのチャリティーが企画されている。主催者は多くの協力を呼び掛けている。

農高と満寿屋 あすパン販売

市役所地下売店横

○…帯広農業高校(八木啓充校長)と満寿屋商店(帯広市、杉山雅則社長)は31日午前9時半から、帯広市役所地下売店横で、チャリティーパン=写真=を販売する。売り上げは全て災害支援として寄付する。

1個150円、300個限定。同校食品科学科の生徒が発案、同校教諭が満寿屋商店に協力を依頼した。若手デザイナー集団「ひよこプロジェクト」、市役所地下売店の「ショップぴあ」も協力する。

パンは石臼びき全粒粉の生地に、十勝産の牛乳と生クリームを練り込んだ牛乳パン。小麦「ハルユタカ」を主に使用している。(大谷健人)

箱分の古着や雑貨を集めたが、被災地へ送る手段がなく、フリーマーケットの開催を決めた。当日はうどんやそばなど飲食コーナーや有志の農家が協力した野菜直売コーナー、キッズスペースも併設する。当日は午後4時まで。問い合わせは西村さん(26・0377)へ。(深津慶太)

2011年3月31日(木)北海道新聞掲載

011年(平成23年)3月31日(木曜日) 北海道新聞

帯広農業高

手作りパンを真心にかえて

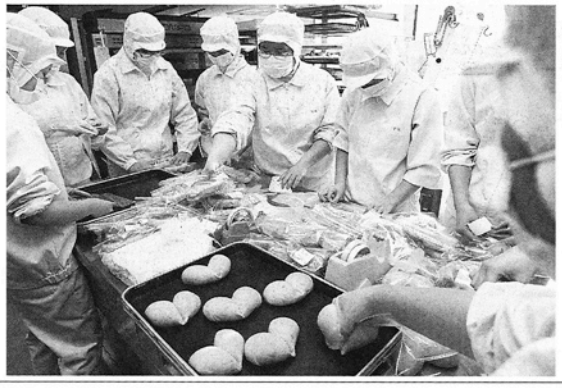
きょう 市役所で販売

「パンを売って真心を届けたい」。東日本大震災の被災地に義援金を送ろうと、帯広農業高の生徒たちが31日、手作りパンを市役所1階で販売する。

食品科学科小麦班の2年生10人。被災地を支援したいと提案し、小麦栽培の実習先だったパン造販売の満寿屋商店の協力を得て実現した。

原料の小麦ハルユタカは昨年4月、同商店麦音店の畑で生徒が種をまき、8月に収穫した。生徒は30日、これた生地をハート形に整えてオーブンに入れ、約300個を焼き上げた。

「まごころパン」と名付けたパンは午前9時半から1個150円で販売、売上金は義援金として被災地に送る。中学時代の修学旅行で宮城や岩手を訪れた井上佳奈さんは「募金だけでなく、私たちにできることをしたかった」と話している。(高尾晋)



焼き上げたパンを一つずつ袋に詰める帯農高の生徒

雑記帳

◇帯広農業高(北海道帯広市)の生徒らが31日、東日本大震災の被災者支援に、食品科学科の生徒が考案したパンを市役所売店でチャリティー販売し、300個をわずか26分で完売した=写真。

◇ハートの形のパンは、名付けて「まごころパン」。生徒が授業の一環で収穫した小麦「ハルユタカ」を使い、十勝産の牛乳と生クリームを練り込んだ。製造には地元の「満寿屋商店」が協力した。

◇道内では修学旅行で東北地方を巡る学校も多い。販売に当たった井上佳奈さん(3年)にとっても中学時代に訪れた思い出の土地だ。「被災地の人に真心を届け、少しでも役に立ちたい」【三沢邦彦】

2011年4月1日十勝毎日新聞

写真レポート

第一弾宮城県復旧本部行き出発

農家からじゃがいも3t

豆120kg

卵1,200個の積込み

帯広畜産大学の皆様と積込み

第二弾岩手県岩泉町行き出発

帯広建設業協会での支援物資積込み

帯広建設業協会と共同支援の出発式

写真レポート

ウィネットからTシャツ

JA足寄からマスク

共働学舎新得農場宮島代表

美藤さん（農家）からジャガイモ

清原さんからホッカイロ

お預かりしました沢山の支援物資

ますやと帯広農業高校の共同チャリティーパン作り

帯広市役所にてチャリティーパン販売

2011年5月19日（金）飯舘村訪問 福島県相馬郡飯舘村の原発被害

19日に飯舘村を訪問しました。バイオマス技術でどのような貢献ができるのか考えてみたいとお話をしていたところ畜産環境整備機構の方と一緒に飯舘村、川俣町の農業者をまわることができました。

飯舘村は一面の水田ですが、水が張られていません。表土が飛散するのを防ぐためにも水を張った方が善いのではないだろうかと思いましたが、話を聞くと水をはって地中深く入っていっては困るということらしいとのこと。

町の一角に放射線量を量って、掲示してある場所がありました。昨日は値はなんと18μシーベルト！
これはすごいと思っていたところ、軽トラにのった近くの農業者がよってくれていろいろお話をしました。

彼によると「今日はもっと行く」というコトらしいのですが、私としては驚くの数値です。

飯舘村では村長にお会いできました。村長とはバイオマスを利用した地域再生の情報交換を短い時間させてもらいました。
飯舘の農業者は道路から見る限り、すごく立派な住宅を構えています。長い間、米作りをおこなって現在に至ったのだなと感じることができる地域です。なかでも、りっぱな農家にお邪魔しました
ご主人曰くは「そとなら5マイクロシーベルト、なかなら2マイクロシーベルト」といっていました。中に入れてもらいいろいろとお話を聞くことができまし た。4代目の米作り農家で６haの水田と７haの牧草地をもち、牛をかっていました。糞が水田の栄養になり、自分の農地ないで循環している農業形態を作り 上げていたようです。

原子力発電所により、避難を余儀なくされていますが、将来展望も明確にはなりません。
この住宅をすてて、よそにいくことができるかどうか。ふるさとを捨てられるのか？飯舘がすばらしいところだっただけに、かえって心配になります。

新聞記事

2011年6月1日水曜日

十勝毎日新聞掲載

曜日）（第3種郵便物認可）十勝毎日新聞【社会】

帯畜大卒の村長 福島県飯舘村

同窓生の窮状救おう

学内に広がる支援の輪

東日本大震災から3カ月近くが経過した今でも高い放射線量が観測されている福島県飯舘村。同村の菅野典雄村長は帯広畜産大学の卒業生だ。「同窓生の力になりたい」と、同大関係者が4月末以降同村を次々と訪問、支援策を探る動きが広がっている。また、同大生協は同村の村おこしの様子を紹介した本の販売も始めた。

空間線量計（掲示板上の赤い物体）が測定した1日ごとの放射線量を確認する村民

菅野村長（左）と情報交換した梅津代表

同村は福島第1原子力発電所から北西約40キロに位置する。NPO法人コミュニティシンクタンクあうるすの梅津一孝代表理事（同大教授）と菊池貞雄専務理事（北海道バイオマスリサーチ代表取締役）は5月19日に同村を訪問した。梅津代表が委員を務める畜産環境整備機構（本部東京）から要請を受けて実現。同村や隣の川俣町で畜産や放牧酪農などを営む3牧場を視察し、菅野村長と情報交換した。

飯舘村の積算放射線量　文部科学省は3月23日～5月30日の間に、同村長泥で測定された積算放射線量が20・23ミリシーベルトと公表。計画的避難区域指定の目安である年間20ミリシーベルトを約2カ月で超えた。

菅野村長は、政府から計画的避難区域に指定され、5月末までに全村避難が迫られている現状を説明。「村民が家畜を連れて北海道へ移住し、再び飯舘村で生活するには大きなリスクを伴うが、それを補う政策が示されていない」と指摘し、放射性物質で汚染された土壌の改良などに協力を求めたという。

・村内の視察では、放牧酪農を営む農家から「放射性物質が牧草に入り込んでいる。もう戻って来られないのでは」と嘆く声も聞いたが、「4代にわたって肉牛を育ててきた畜産農家からは、代々の土地から離れたくないという思いを感じた」と菊池専務。

また、菊池専務は物資などを送るだけでなく、産業振興を支援しなければならない。十勝でチーズ製造や畑作技術などを学んでもらい、飯舘に帰ってから雇用創出につながる仕組みができれば。バイオマスリサーチ社としても支援を検討していく」と語る。

同大の長澤秀行学長は「飯舘村では今後の生活をどうするかという状況。5月に入って政府や福島県などがヒマワリを使って農地の除染実験を始めており、タイミングを図って学術的な長期支援に取り組みたい」としている。

梅津代表と菊池専務は村の様子について「地割れなどが一部に見られる程度で、一見何の被害もないように見えた」と口をそろえる。しかし、同村南部の長泥（ながどろ）地区に設置された空間線量計では18日に毎時18マイクロシーベルトの放射線量を記録。菊池専務は「毎日、掲示板に張り出される放射線量の高さに驚いた。一方で村の人は防護服を着ておらず、とても違和感を覚えた」と振り返った。

（深津慶太）